御所まち伝建通信

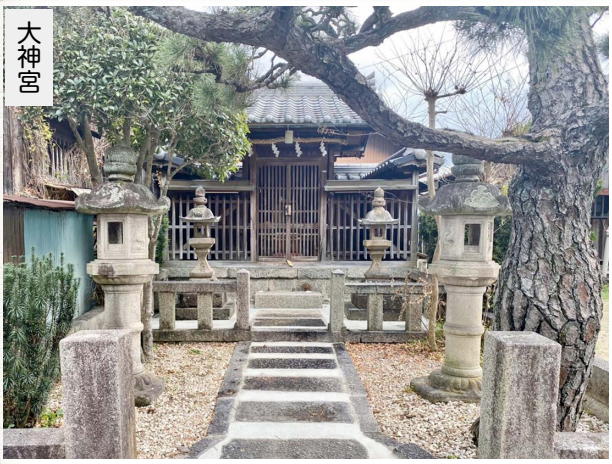
文化財課
☎60・1608

第12回 町並みを彩る信仰

伝統的建造物群保存地区を目指して行われた保存対策調査では、御所まちの景観の豊かさや建物の特徴が解明されました。この成果を伝えるべく始めた伝建通信の連載も本号で最終回となります。今回は、御所まちの人々の営みに深い関わりを持ち、町並みを彩る信仰について紹介します。

御所まちを歩いていると至る所に祠（ほこら）や灯籠（とうろう）、石仏を見かけます。これらの多くは江戸時代につくられたもので、まちの人々によって江戸時代から連綿と引き継がれ、今でも信仰の対象として守られています。信仰と結びついた工作物は、そのまちの固有性を伝えるものです。

1. 伊勢信仰と関わる大神宮


大神宮

江戸時代、伊勢神宮への群参現象、通称「おかげ参り」が起こりました。伊勢神宮への中継地点であった御所まちには多くの旅人が宿泊し、食事や風呂の世話をしました。西御所の神宮町は、江戸時代には会所前と呼ばれていて蔵屋敷（藩が設置した年貢米等を納めた倉庫）があったそうです。その蔵屋敷がおかげ参りをする人々の宿泊地でした。現在、この地には大神宮があり、おかげ参りの後に建てられました。また、町内に点在する大神宮と書かれた灯籠は、伊勢講仲間によって行った日待講（ひまちこう）（特定の日に町内の仲間が集まって籠（こも）り明かし、日の出を拝む行事）に関連するものです。

2. 防災意識と愛宕（あたご）信仰

御所まちを歩くと、町家の壁に小さな祠が貼り付いているのを見かけます。これは火難除（かなんよ）けの愛宕信仰に関わる祠で、ほかにも独立した灯籠の形をしたものもあります。また、同じく火伏（ひぶ）せの神を祀（まつ）った秋葉灯籠も、東御所に2か所残っています。木造建築の大敵は何といっても火事です。かつては、火伏せの意識を再確認するために、地域の人々がこうした愛宕社や灯籠に火を献じていました。

3. 水害の歴史を物語る白龍稲荷（はくりゅういなり）や地蔵

元文5年（1740）、「御所流れ」と呼ばれる大洪水に見舞われ、西御所のほとんどが被災しました。そのため、西御所の葛城川と柳田川の堤防には、水の神・白龍を祀る稲荷社が建てられました。

また、まちの中には複数の地蔵がありますが、これらは御所流れで流れ着いたという言い伝えも残っています。

白龍稲荷

地蔵

4. 商売繁盛を祈る恵比須（えびす）神社

商売の神様を祀る恵比須神社は現在は御所まちの外にありますが、江戸時代には中央通りに鎮座していました。その恵比須神社の南側には「魚町筋（うおまちすじ）」という道があり、江戸時代、その道沿いで定期市が開かれていたそうです。

恵比須神社

右：壁付きの愛宕の小祠
左：愛宕の灯籠